

## 特集2：ナショナルアイデンティティとコミュニティ —平和的共存をめぐる政治

浪岡 新太郎  
(PRIME 所員)

今回の特集で取り上げる2本の論文は、ともに2010年度明治学院大学国際平和研究所シンポジウム「ナショナルアイデンティティとコミュニティ—平和的共存を巡る政治」において報告された内容をもとに大幅に加筆修正のうえ、査読を受けている。シンポジウムの報告を代表するような二本の査読論文を収録できたことを喜ぶたい。

本シンポジウムは「さまざまなコミュニティの平和的共存は、もはや政策的目標にならないのだろうか」という問いから構成された。近年、ヨーロッパにおいて同化主義的なナショナルアイデンティティの重要性を強調する議論が目立つようになってきている。そして、多文化主義モデルや多極共存モデルといった多様なコミュニティの平和的共存を志向した政策モデルは、英国、オランダといった従来こうしたモデルを強く主張してきた国々においてすらその欠陥が強く指摘されている。

かつては極右政党の特徴であったはずの、ナショナルアイデンティティの「本質」の強調や「国民らしさ」の擁護といった議論が、シティズンシップテストを義務化した制限的な移民政策や社会統合政策といった形で各国政府によって積極的に取り込まれるようになってきている。そして、こうしたナショナルアイデンティティによる排除や周縁化は外国人のみを対象としているのではない。いわゆる「移民第二世代」といった表現がまさに示すように、国民ですら、一部の者は「ナショナルアイデンティティ」の不足が疑われる。そのために、彼らを「国民らしく」することが政策課題とされ、シティズンシップ教育の強化が政策上注目を浴びている。

「ナショナルアイデンティティ」に対立するものとして注目されるのが「宗教」、とくに「イスラーム」である。人権団体をはじめEUの人権擁護機関もイスラモフォビアの拡大に警鐘を鳴らしている。ナショナルアイデンティティの重要性を強調する議論や政策の中で、イスラーム以外の宗教的コミュニティは、さらには非宗教的なコミュニティはどのように認識されているのだろうか。こうした議論や政策の登場はヨーロッパに固有のものなのだろうか。ナショナルアイデンティティは、さまざまなコミュニティとの関係において日本や「南」側ではどのように問題化しているのだろうか。

本シンポジウムでは、こうした問いを視野に入れて、同化主義的なナショナルアイデンティティを強調する議論や政策において、「ムスリム」と自己カテゴリー化する／カテゴリー化される人々のコミュニティをはじめ、「クリスチャン」や「障害者」など非宗教的なものも含むさまざまなコミュニティが具体的にどのような排除や周縁化を経験しているのか／してきたのかを明らかにし、こうしたコミュニティの側からの抵抗と乗り越えの試みを比較検討することで、より平和な政治秩序形成のためのアイ

ディアを探った。

本号で収録した二論文は、ともに、宗教的アイデンティティとナショナルアイデンティティとの調和、葛藤、対立を特に扱ったものである。フレゴジ氏の論文は、宗教儀式の実践としてのイスラームと、信者としてのムスリムの生活がどのようにヨーロッパの中で保障されていくのかを制度化という観点から扱っている。この論文は、イスラームとムスリムの制度化の問題を「行政機関主導」もしくは「ムスリム主導」と見るのではなく、イスラーム諸国やEUの影響を考慮しつつ行政機関とムスリムとの葛藤の中で生み出されるものとして把握することで、一面的な制度化の理解を退け、制度化のダイナミクスを明らかにすることに成功している。

また、片野氏の論文は、キリスト教平和思想からの良心的兵役拒否とその代替としての「文民公共奉仕制度」の意味をナショナルアイデンティティとコミューナルアイデンティティとの相克関係として描き出している。この論文が明らかにするのは、宗教上の平和思想へのコミットメントと戦争へのナショナルなコミットメント、ナショナルなアイデンティティに基礎を置いた徴兵義務との関係である。

トランスナショナルな、また、普遍性を強く主張するイスラーム、キリスト教アイデンティティがそれぞれどのようにナショナルアイデンティティの本質性の主張や同化主義と交錯していくのか、今後も検討していきたい。